

改訂版エンカウンター・グループ セッション・ アンケート作成の試み

Revision of Encounter Group Session Questionnaire

坂中正義

高橋紀子

Masayoshi SAKANAKA

Noriko TAKAHASHI

福岡教育大学教育学部

京都文教大学

学校教育講座心理学研究室

臨床心理学部臨床心理学科

(平成20年9月1日受理)

Abstract

The purpose of this study is to revise the questionnaire administered in the encounter group session.

First, the author examined the results of the open-ended questions presented formulated ten questionnaire items with regard to the member's experience with encounter group sessions.

Second, he administered these items to two groups. From the results obtained he further created 13questionnaire items.

Next, the author administered these items to three structured encounter groups and four basic encounter groups. From the results obtained, he discussed the characteristics of the questionnaire was useful for clinical practice and was wholly beneficial for various encounter groups.

Keywords: encounter groups, session questionnaire, facilitation

要約:

本研究の目的は、エンカウンター・グループの実践において比較的に利用されている自由記述を中心としたセッションアンケートに、メンバーのセッション体験を数量的に把握できる項目を加えて、セッション・アンケートを改訂することである。

まず、試案としてメンバーによる自由記述や先行研究、著者の臨床実践経験をもとに10項目作成し、2グループに試行した。実施状況から項目を再検討し、最終的に13項目を設定した。

次にこの項目を構成的エンカウンター・グループ3グループとベーシックエンカウンターグループ4グループにおいて実施した。その結果、改訂されたアンケートの基本的な特徴が検討され、実用性、汎用性を持ったアンケートであることが示された。

キーワード: エンカウンター・グループ, セッションアンケート, ファシリテーション

問題と目的

エンカウンター・グループ（以下、EG）は、メンバー1人1人が、セッションをいかに過ごすかがグループの展開にもメンバーの成長にも大きな影響をもたらす。ファシリテーター（以下、fac.）は、セッション中のグループの雰囲気やメンバー1人1人の活動状況、発言、様子などをファシリテーションの主な情報源としつつ、各メンバーの体験を押し量り、fac.自らのそのセッションでの動きや次のセッションの動きを考える。しかし、構成的エンカウンター・グループ（以下、SEG）のようにメンバーが数十人の規模になると、fac.がメンバー全員に目を向けることは困難になる。加えて、SEGでは小グループに分かれて活動することも多いが、fac.が各グループでの活動に直接参入するのは困難で、メンバー1人1人のセッションでの体験はきわめて限定的にしか知ることができない。一方、ベーシック・エンカウンター・グループ（以下、BEG）では、fac.の目が届きやすいメンバー数で、かつfac.がグループ内で直接メンバーと関わるため、SEGにくらべるとメンバーの体験を理解しやすいが、メンバーの体験がすべて語られる訳ではなく、またすべてのメンバーがそれを表現する訳ではない。さらにメンバーの参加態度や他者に関わる姿勢などは観察だけでは知り得る情報は限定される。

このようなメンバーの体験世界を知る手がかりとなるのが、各セッション終了後にメンバーが記入するセッション・アンケートである。

EGで用いるセッション・アンケートは、研究重視のものを除くと、それぞれのfac.が工夫して独自のものを作成している。B6カードに何も項目を指定せず、書きたいことを書くといったものもあれば、いくつか項目を指定し、それについて感想を書くといったものもある。そういった様々な工夫の中で、比較的フォーマットが整っており、これまでの膨大なEG実践の中で繰り返し活用されてきたものとして、福岡人間関係研究会を中心に発展してきたものがある（野島，1982）。このセッション・アンケートは、メンバーがいくつかの観点（「グループの動き・雰囲気、他のメンバーの動き」「自分の動き、感情の流れ、行動」「ファシリテーターについて」「満足した点」「不満足なこと、心残りなこと、気がかりなこと」「その他どのようなことでも自由に記述してください」）に関して自由に記述した上で、セッションの魅力という数量的指標を問うものである。このセッション・アンケートはSEG、BEG双方で活用が

可能な汎用性のあるアンケートであり、メンバーのセッション体験を把握しつつ、次のセッションの方針を考える上で大いに参考になる。

自由記述欄はメンバーのリアルな体験に迫ることのできる有用なツールになっている。また、自らの体験を振り返って文章に記すことはメンバー自身が自分の体験を振り返り、その体験を自らの中に位置づける上でも大いに役立っているようである。

一方、セッションの魅力度については、セッション理解の総合的な指標として有用であり、亀石・茂田・村山（1981）や坂中（2003）などにおいてもグループ・プロセスやメンバーの成長との関連性が示されている。ただし、具体的なEGの実践に場においては、魅力度は総合的な指標だけに、メンバーのどのような体験を指し示すか把握しにくい。もう少しメンバーの具体的な体験に近い数量的指標の方が臨床の場では役立ち、その意味で数量的指標については未だ検討の余地があると考えられる。

このような数量的指標を検討する際、EGの具体的な実践の文脈だけでなく、研究の文脈でも考慮すべき課題がある。先のセッション・アンケートは前述の通り、BEGやSEGでも使用可能な汎用性の高いものである。異なる特徴をもつグループにおいても同じツールが使用可能ということは両者の比較を容易にする。EGの研究という文脈では特にSEGのグループ・プロセスの研究が課題としてあげられるが（野島，1992など）、この観点からいえば、数量的指標も汎用性の高い項目を考案する必要がある。

以上より、本研究では、福岡人間関係研究会を中心に発展してきたセッション・アンケートに、メンバーのセッション体験の内実が検討でき、次のセッションのファシリテーションの指針となる数量的指標をSEG、BEGでも共用可能な形で作成し、従来のセッション・アンケートを補完することを目的とする。あわせて、いくつかのグループで実施し、基礎的データを得ることも目的とする。

予備研究

方法

原案作成 自由記述欄の観点は従来のままとした。魅力度もセッション理解の総合指標として踏襲し、それ以外の具体性の高い数量的指標をもちこむこととした。

項目は、これまで実施したEGにおけるメンバー

の自由記述欄の記載内容、先行研究、著者のメンバー体験・ファシリテーター体験を踏まえ検討した。その際「毎セッション終了後にメンバーに記入を求めるので、負担軽減のため項目は厳選すること」「メンバーのセッション体験のうち、発言や活動からは把握しにくい側面を重視すること」を方針とした。

その結果、次のような10項目を原案とした¹。「1. 安心感を感じた（セッションに対する安心感・安全感は、グループ体験のもっとも重要な要素と考えた。）」（以下、Q1）、「2. 自分を十分に表現した（いずれのEGの形態においても自己表現は重要な役割を担うと考えた。）」（以下、Q2）、「3. 他のメンバーへ積極的に関わった（いずれのEG形態においてもどのように他者と関わったかはセッション体験の重要な要素であると考えた。）」（以下、Q3）、「4. セッションに積極的に取り組んだ（メンバーのセッションへのコミットメントを知ることが様々な意味で次のセッションの方針の参考になると考えた。また発言や行動では見えないが内的にはコミットしているといったことこそ、このようなアンケートで知る必要がある。）」（以下、Q4）、「5. セッションを（無理矢理）やらされた（特にSEGを意識した項目で、セッションの「させられ感」を知ることはメンバーの心理的負担や傷つきなどを知り、対応する上で重要なことと考えた。これはBEGにおいても同様である。なお、このようなことは自由記述欄には書きにくいところもあるが、評定法だと比較的書きやすい。）」（以下、Q5）、「6. ファシリテーターからの配慮を感じた（特にBEGを意識した項目で、fac.の態度はグループの展開に大きな影響を与える。SEGにおいてもエクササイズや見守り方などを通じてfac.の態度は伝わるであろうと考えた。）」（以下、Q6）、「7. メンバーからの配慮を感じた（Q6とセットで採用した項目。特にBEGを意識し、メンバーに配慮するのはfac.だけでないと考えた。さらにSEGにおいては、メンバーの配慮がセッション体験にfac.のそれよりもダイレクトに影響すると思われた。）」（以下、Q7）、「8. 他のメンバーへ配慮した（Q7とセットで採用した項目。メンバー自らも他のメンバーへ配慮する存在である。Q3よりも目に見えにくいところを把握できる項目でもあると考えた。）」（以下、Q8）、「9. 自分に向き合えた（自己理解はいずれのEGにおいてもそ

の目的とされるが、項目として自己理解と問うと何らかの自己理解できた内容があったかどうかを想起される。グループの最終的な効果としては適切ともいえるが、そのプロセスで問うのは、自己理解への姿勢のようなものが適切であろうと考えた。）」（以下、Q9）、「10. 他のメンバーに向き合えた（他者理解もはいずれのEGにおいてもその目的とされるため、Q9とセットに採用した項目。姿勢を問うている理由は9とほぼ同様である。）」（以下、Q10）。

なお、いずれの項目も魅力度と同様、セッションの合間にもfac.が参考にしやすいよう、単純な7件法とした。

試行 アンケートの原案をSEG 1グループ（大学生・大学院生対象の自発参加グループで、1泊2日の日程で3セッション）、BEG 1グループ（大学院生対象の自発参加グループ 3泊4日の日程で9セッション）で試行し、項目を検討した。いずれのグループもfac.は著者が担当している。

結果と考察

試行した結果、原案の10項目は、いずれの形態のグループにおいても実施上不適切な項目はなく、次のセッションのファシリテーションを考える上で参考になった。特にQ5のように自由記述では出にくい（書きにくい）事柄は、あらかじめ項目を設定したことで把握できるメリットがあった。

利便性の面でも、集計などの必要がないシンプルな項目なので、セッション終了後の短時間のふりかえりでも、メンバーの記入したものを概観でき、メンバーやグループの動きを知る上で大いに参考になった。

また、メンバーにこのアンケート自体の感想を求めたところ、これらの項目をつけることで自身の体験が振り返ることができるという反応を得た。

ただし、試行する中で、ファシリテーションを考える上で重視しているメンバーの「疲れ」が測定できると方針を検討する際に役立つのではないかという感触を得たことと、原案にグループ全体への視点が無かったが、それらの項目もメンバーのセッション体験を理解する上で重要であろうと考え、それらに関わる3項目を追加し、最終的には13項目とした。追加された項目は次の通りである。「11. 疲れを感じた（採用の理由は前述の通りである。EG中の疲れは、その意味するところは多義的であるものの、やはりセッションが反映されたものであり、また次のセッションに影響を与えるものである。よって、疲れは次のセッショ

¹ 括弧内に項目採用の理由を簡単に記載した。

ンの方針を考える上で重要な視点となる。Q5にも関連しているが、どちらか1つで代表できるほど重複していないと考えた。」(以下、Q11)、「12. 他のメンバーに親近感を感じた(採用の理由は前述の通りである。具体的なメンバーへの距離感を問うことで親密な人間関係を把握できると考えた。)」(以下、Q12)、「13. グループにまとまりを感じた(採用の理由は前述の通りである。Q12と被る懸念もあったが、グループの凝集性という視点も重要で、Q5とQ11の関係と同様、どちらか1つで代表できるほど重複していないと考えた。)」(以下、Q13)。これらの13項目と従来の自由記述と魅力度をあわせて、改訂版エンカウンター・グループセッション・アンケート(以下、EGSQ-R)とした(付録参照)。

本研究

方法

アンケート 予備研究で得たEGSQ-Rを実施した。

対象 SEG 3グループ78名(それぞれ38名, 22名, 18名)。うち男性14名, 女性64名。平均年齢22.94才(標準偏差 5.32)。3グループとも大学生・大学院生対象の自発参加グループで、1泊2日の日程で3セッション実施された。なお、いずれのグループもfac.は1名で、著者が担当している。グループの展開は一定の水準には達しており、対象として適切であると判断された。BEG 4グループ27名(それぞれ7名, 6名, 9名, 5名)。うち男性10名, 女性17名。平均年齢26.63才(標準偏差 7.70)。4グループとも大学院生対象の自発参加グループで、3泊4日の日程で9セッション

実施された。なお、いずれのグループもfac.は2名で、そのうち1名は著者が担当している。グループの展開は一定の水準には達しており、対象として適切であると判断された。

結果と考察

作成したEGSQ-Rの特徴を、本研究で追加した13項目に限って、SEG, BEGごとに検討する。その際に従来、セッション理解の総合指標として用いられた魅力度との関連も検討する。

なお、作成した項目の特徴を詳細に検討するには、因子分析や重回帰分析などが不可欠であるが、データ数(特にBEG)が十分でないことや、本研究の目的が「実際のファシリテーションに役立つ、様々なEG形態において汎用性が高いアンケートの作成」ととどめているので、分析は基礎的なもののみとする。

また、セッションごとの項目の変化の意味を詳細に検討するには、各事例ごとに各セッションの記述(SEGにおいてはどんなエクササイズを行ったか、BEGにおいてはセッションの詳細な記録など)に照らした理解が不可欠であるが、この点についても今回は割愛し、目的に沿った程度の検討に差し控える。

SEG 対象グループで13項目について実施した結果、SEGでの実施上、特に不適切な項目はなかった。

次にセッション毎に各項目の基本統計量を算出し、セッション進行に伴う平均値の推移をtable 1に示した。魅力度はセッション進行にともない、高まっている。魅力度を基準に考えると、同様の

table 1 セッションアンケートの基礎データ (SEG)

	セッション1		セッション2		セッション3	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
1) 安心感を感じた。	5.11	1.25	5.65	0.95	5.39	1.42
2) 自分を十分に表現した。	5.00	1.27	5.57	1.01	5.56	1.03
3) 他のメンバーへ積極的に関わった。	4.92	1.26	5.54	0.96	5.69	1.19
4) セッションに積極的に取り組んだ。	5.63	0.82	5.89	0.70	6.00	1.10
5) セッションを(無理矢理)やらされた。	1.63	1.02	1.57	0.87	1.69	1.14
6) ファシリテーターからの配慮を感じた。	5.21	1.23	4.89	1.13	5.03	1.28
7) メンバーからの配慮を感じた。	5.21	0.99	5.43	1.09	5.64	0.96
8) 他のメンバーへ配慮した。	4.58	1.06	4.84	1.19	5.36	0.80
9) 自分に向き合えた。	5.00	1.27	5.14	1.00	5.50	1.00
10) 他のメンバーに向き合えた。	5.08	0.97	5.51	0.73	5.58	1.02
11) 疲れを感じた。	3.13	1.58	3.24	1.85	3.81	1.80
12) 他のメンバーに親近感を感じた。	5.32	1.02	5.76	0.68	5.78	0.83
13) グループにまとまりを感じた。	4.84	1.22	5.78	0.79	5.49	1.12
セッション魅力度	5.50	1.03	5.81	0.91	6.08	0.91

パターンで推移しているのは、Q3, Q4, Q7~Q11, Q12である。これらの項目は積極性や配慮などに関わる項目が中心だが、ファシリテーション上、疲れも同様に動いていることは注目しておく必要がある。これら以外の項目は魅力度と異なるパターンで推移している。

さらに、セッション毎の魅力度と各項目の関連をピアソンの相関係数によってtable 2に示した。概観すると非常に多くの項目が魅力度と中程度以上の相関（相関係数が0.40以上）を持っていることが確認できる。これは魅力度がセッションを総合的に理解する指標として妥当であることを示している。また、セッションを重ねるにつれ、中程度以上の相関が見られる項目が増加する様相から、セッション進行に伴い、各項目がより連動して動くようになることが読みとれる。なお、関連の様相を細かく検討すると、魅力度と一貫して中程度以上の相関がみられる項目群（Q1, Q5, Q10, Q12, Q13）とそうでない項目群がある。いずれの群内においても相関係数の強弱のパターンは一律でない。これらの結果は、魅力度と各項目がさし示す体験とのつながりはセッションごとに変化することを示唆している。

以上より、SEGにおいてEGSQ-Rの数量的指標の各項目は、セッションにおけるメンバーの体験している異なる側面を把握することが可能で、グループ展開とメンバーの体験の関連も多面的に検討できる有用な項目であることが確認された。

BEG 対象グループで13項目について実施した結果、BEGでの実施上、特に不適切な項目はなかった。

次にセッション毎に各項目の基本統計量を算出し、セッション進行に伴う平均値の推移をtable 3に示した。魅力度は#5まではセッション進行に伴って高まり、その後、一旦後退するものの、再度上昇し、#9で最も高くなる。魅力度を基準に考え、同様のパターンで推移しているものを確認したが、非常に近いパターンは見受けられるものの、全く同様のものはなかった。なお、セッションごとに直前のセッションとの比較をすると#2, #8はいずれの項目も望ましいと思われる方向へ変化していた。#3も似た傾向が確認できるが、Q11は逆の方向へ動いている。#6, #7も直前のセッションからの推移パターンが類似している。ここは多くの項目が望ましくない方向に変化しているが、Q1とQ11は望ましい方向に変化している。Q2とQ12は#6, #7では異なった動きをしている。

さらに、セッション毎の魅力度と各項目の関連をピアソンの相関係数によってtable 3に示した。概観すると非常に多くの項目が魅力度と中程度以上の相関を持つことが確認できる。これは魅力度がセッションを総合的に理解する指標として妥当であることを示している。また、セッションを重ねるにつれ、中程度以上の相関が見られる項目が増加する様相からは、セッション進行に伴い、各項目がより連動して動くようになることが読み取れる。なお、関連の様相を細かく検討すると、魅力度と一貫して中程度以上の相関がみられる項目群（Q1, Q2, Q3, Q4, Q10, Q12, Q13）とそうでない項目群がある。いずれの群内においても相関係数の強弱のパターンは一律でない。こ

table 2 セッションごとの魅力度と各項目の相関係数 (SEG)

	#1	#2	#3
1) 安心感を感じた。	0.71 **	0.53 **	0.60 **
2) 自分を十分に表現した。	0.47 **	0.33 **	0.60 **
3) 他のメンバーへ積極的に関わった。	0.23 *	0.43 **	0.62 **
4) セッションに積極的に取り組んだ。	0.39 **	0.63 **	0.70 **
5) セッションを（無理矢理）やらされた。	-0.53 **	-0.48 **	-0.47 **
6) ファシリテーターからの配慮を感じた。	0.23 *	0.42 **	0.46 **
7) メンバーからの配慮を感じた。	0.31 **	0.41 **	0.53 **
8) 他のメンバーへ配慮した。	0.08	0.24 *	0.47 **
9) 自分に向き合えた。	0.46 **	0.35 **	0.38 **
10) 他のメンバーに向き合えた。	0.50 **	0.56 **	0.63 **
11) 疲れを感じた。	-0.57 **	-0.39 **	-0.43 **
12) 他のメンバーに親近感を感じた。	0.71 **	0.68 **	0.68 **
13) グループにまとまりを感じた。	0.65 **	0.51 **	0.55 **

注1) #はセッションを表す。

注2) *...5%水準 **...1%水準

table 3 セッションアンケートの基礎データ (BEG)

	#1	#2	#3	#4	#5	#6	#7	#8	#9									
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD								
1) 安心感を感じた。	5.15	1.19	5.37	0.93	5.56	1.12	5.96	0.68	5.46	0.99	5.50	0.91	5.56	1.01	5.63	1.24	5.85	1.08
2) 自分を十分に表現した。	4.23	1.73	5.19	1.24	5.28	1.21	5.52	0.77	5.54	1.27	5.54	0.86	5.19	1.39	5.59	1.42	5.62	1.36
3) 他のメンバーへ積極的に関わった。	3.96	1.64	5.00	1.30	5.04	1.21	5.60	0.76	5.65	1.09	5.40	1.04	4.81	1.55	5.04	1.70	5.15	1.35
4) セッションに積極的に取り組んだ。	4.46	1.42	5.22	1.05	5.28	1.14	5.68	0.63	5.77	0.95	5.65	1.09	5.04	1.70	5.44	1.67	5.65	1.44
5) セッションを(無理矢理)やらされた。	2.38	1.24	1.93	1.17	1.56	0.92	1.44	0.77	1.42	0.76	1.65	1.06	1.81	1.33	1.59	1.01	1.42	0.64
6) ファシリテーターからの配慮を感じた。	5.23	0.91	5.37	0.84	5.60	0.87	5.60	0.91	6.12	0.91	6.04	0.72	5.52	1.16	5.85	0.99	6.35	0.85
7) メンバーからの配慮を感じた。	5.04	1.00	5.41	0.75	5.36	0.91	5.32	0.69	5.96	0.87	5.62	0.85	5.37	1.28	5.70	1.17	5.62	1.20
8) 他のメンバーへ配慮した。	4.38	1.24	4.44	1.22	4.84	1.11	4.71	1.12	5.42	1.27	5.42	1.03	4.63	1.57	5.07	1.59	5.04	1.37
9) 自分に向き合えた。	4.04	1.46	4.52	1.40	5.24	1.05	4.56	1.12	5.65	1.16	5.42	1.21	4.78	1.55	5.81	1.11	5.81	0.90
10) 他のメンバーに向き合えた。	3.96	1.43	4.70	1.10	5.28	0.84	4.96	1.06	5.62	1.33	5.50	0.99	4.69	1.44	5.52	1.19	5.50	1.21
11) 疲れを感じた。	3.42	1.53	3.04	1.65	3.24	1.61	3.76	1.56	3.73	1.85	3.73	2.16	3.54	1.98	3.33	1.92	3.04	1.89
12) 他のメンバーに親近感を感じた。	4.69	1.12	5.22	0.97	5.32	0.99	5.64	0.76	5.46	1.10	5.85	0.83	5.19	1.42	5.67	1.21	5.62	1.02
13) グループにまとまりを感じた。	3.77	1.42	5.15	0.86	5.32	0.95	5.68	0.90	5.81	0.69	5.69	0.93	5.19	1.24	5.81	0.96	5.77	1.07
セッション魅力度	4.65	0.85	5.15	0.86	5.24	1.05	5.48	0.77	5.73	0.92	5.46	0.81	5.48	1.16	5.67	1.24	5.92	0.93

table 4 セッションごとの魅力度と各項目の相関係数 (BEG)

	#1	#2	#3	#4	#5	#6	#7	#8	#9
1) 安心感を感じた。	0.41 *	0.60 **	0.80 **	0.60 **	0.54 **	0.65 **	0.78 **	0.89 **	0.70 **
2) 自分を十分に表現した。	0.58 **	0.76 **	0.54 **	0.55 **	0.44 *	0.61 **	0.45 *	0.49 **	0.73 **
3) 他のメンバーへ積極的に関わった。	0.57 **	0.58 **	0.48 *	0.41 *	0.54 **	0.30	0.57 **	0.77 **	0.74 **
4) セッションに積極的に取り組んだ。	0.64 **	0.73 **	0.67 **	0.59 **	0.75 **	0.59 **	0.70 **	0.93 **	0.72 **
5) セッションを(無理矢理)やらされた。	-0.44 *	-0.44 *	-0.84 **	-0.65 **	-0.58 **	-0.55 **	-0.64 **	-0.51 **	-0.48 *
6) ファシリテーターからの配慮を感じた。	0.42 *	0.51 **	0.52 **	0.17	0.61 **	0.45 *	0.32	0.62 **	0.69 **
7) メンバーからの配慮を感じた。	0.44 *	0.68 **	0.52 **	0.33	0.79 **	0.79 **	0.45 *	0.59 **	0.72 **
8) 他のメンバーへ配慮した。	0.32	0.04	0.39	-0.14	0.58 **	0.48 *	0.61 **	0.66 **	0.63 **
9) 自分に向き合えた。	0.56 **	0.54 **	0.40 *	0.50 *	0.73 **	0.53 **	0.56 **	0.15	0.60 **
10) 他のメンバーに向き合えた。	0.62 **	0.53 **	0.58 **	0.43 *	0.76 **	0.65 **	0.59 **	0.67 **	0.67 **
11) 疲れを感じた。	-0.10	-0.38 *	-0.50 *	-0.59 **	-0.09	-0.52 **	-0.62 **	-0.37	-0.66 **
12) 他のメンバーに親近感を感じた。	0.52 **	0.51 **	0.60 **	0.52 **	0.56 **	0.70 **	0.65 **	0.77 **	0.81 **
13) グループにまとまりを感じた。	0.63 **	0.54 **	0.59 **	0.47 *	0.42 *	0.73 **	0.53 **	0.43 *	0.78 **

注1) #はセッションを表す。

注2) *...5%水準 **...1%水準

これらの結果は、魅力度と各項目がさし示す体験とのつながりはセッションごとに変化することを示唆している。

以上より、BEGにおいてEGSQ-Rの数量的指標の各項目は、セッションにおけるメンバーの体験している異なる側面を把握することが可能で、グループ展開とメンバーの体験の関連も多面的に検討できる有用な項目であることが確認された。

総合考察

EGSQ-Rについて SEG, BEGいずれにおいてもEGSQ-Rの項目はグループ・プロセスと様々な形で結びついており、メンバーの体験を把握するために有用であることが確認できた。推移のパターンも各項目で違いが見られ、セッションでのメンバーの体験を多面的に理解することが可能であった。また、いずれの形態のグループでも使用可能であり、今後EGSQ-Rをもちいた両形態のグループにおける共通性と差違性的の検討が可能となった。

EGSQ-Rの活用可能性 臨床の場では、EGSQ-Rを本研究で提示したように平均を算出し、全体の傾向を把握するためでなく、メンバー1人1人を個別に理解するために用いる。その際の活用可能性は様々な考えられるが、ここではEGSQ-R全般について該当する「記入内容と実際のずれ」と特定の項目の活用としての「Q5やQ11のやらされ感や疲れの取り扱い」の2点について述べる。

まず前者だが、実際にEGSQ-Rを使用してみると、セッション中の動きや様子とアンケートの記入内容のずれが気になるメンバーが見受けられる。このこと自体、EGSQ-Rがねらい通りに作成されていることを意味するが、このずれ自体がメンバー理解を深める重要な手がかりとなる。また、セッション・アンケートはセッション中には表現できない思いをfac.には伝えることが可能なツールである。ズレがあるメンバーはそのような思いが強いかもしい。いずれにせよ、ここで得た情報を次のセッションのファシリテーションに活かしてゆくことは、1人1人を大切にしながらグループをファシリテートしていく上で重要であろう。

次に後者だが、「やらされ感」や「疲れ」を感じているということはそのメンバーがセッションを主体的に体験できていないことを示唆している。それはQ3やQ4のようなセッションやメンバーに積極的に関わるといような積極性という意味ではなく、その場で自分が体験していることと適切な間合いで関わることが可能であるという主体

性である。セッションやそこでのやり取りが侵入的であったり、心理的にも身体的にも本人のレディネスができて以上のことがセッションで要求されれば、そのメンバーは「やらされ感」を感じたり、「疲れ」を感じるであろう。ここでいう主体的な体験とはおそらく吉良(2002)の「主体感覚」を持てる体験に近い概念である。このメンバーの主体感覚の持てなさを把握するのは、グループの安全感を保証する上で重要である。またBEGにおいては、メンバーがセッションで「やらされ感」や「疲れ」を表明することが、そのメンバーにとっては主体感覚を取り戻す動きとなるし、グループにとってはプロセスが展開するきっかけにもなる。ここに着目しつつ、ファシリテーションを考えることは重要であろう。

今後の課題 本研究ではEGSQ-Rを作成し、実際のグループで実施することにより、その可能性を探ることが目的としたため、項目の詳細の検討は行っていない。統計的にも基礎的なデータを提示したにとどまっている。今後はEGSQ-Rの特徴を明らかにするためにも、項目間の関係性を検討するために因子分析を行ったり、各項目がセッションごとに魅力度とどう結びつくかを検討するため、重回帰分析などを用いた詳細な検討を行う必要がある。一方で、EGSQ-Rの各項目の変化は実際のグループの動きとどう結びついているのかを事例の中で明確にしてゆくこともEGSQ-Rの特徴を明らかにする上で重要である。また、EGSQ-RからみたSEGとBEGのプロセスの違いを明らかにすることも課題としてあげられる。さらに臨床での活用という観点からは、各項目からどのようなことが読み取れ、それをふまえた方針とはどのようなものであるかを事例を通して検討してゆくことが課題であろう。

付記：本論文は日本心理臨床学会第24回大会において発表した研究をもとに更なるデータの収集を行い、大幅に加筆・修正したものである。調査にご協力いただいたエンカウンター・グループの参加メンバーの方々に深く御礼申し上げます。

文献

亀石圭志・茂田みちえ・村山正治 1981 BASIC ENCOUNTER GROUPの発達過程に関する一考察—対集団魅力度の構造を手がかりとして—九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）、25(2)、51-61.

吉良安之 2002 主体感覚とその賦活化—体験過程療法からの出発と展開—九州大学出版会
 野島一彦 1982 エンカウンター・グループ構成論 福岡大学人文論叢, 14(1), 1-32.
 野島一彦 1992 文献研究の立場からみた構成的グループ・エンカウンター 國分康孝編「構成的

グループ・エンカウンター」誠信書房, 23-34.
 坂中正義 2003 ベーシック・エンカウンター・グループの効果に影響を及ぼすものは何か?—参加前条件とセッション魅力度の観点から—日本カウンセリング学会第36回大会発表論文集, 98.

(付録)

___グループ ___セッションの感想 ___月 ___日 氏名 _____

・グループの動き・雰囲気・他のメンバーの動き

・自分の動き、感情の流れ、行動

・ファシリテーターについて

・満足した点

・不満足なこと、心残りなこと、気がかりなこと

・その他、どんなことでも自由に書いてください

・今のセッションで当てはまるところに○をつけてください。

1) 安心感を感じた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

2) 自分を十分に表現した。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

3) 他のメンバーへ積極的に関わった。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

4) セッションに積極的に取り組んだ。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

5) セッションを（無理矢理）やらされた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

6) ファシリテーターからの配慮を感じた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

7) メンバーからの配慮を感じた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

8) 他のメンバーへ配慮した。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

9) 自分に向き合えた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

10) 他のメンバーに向き合えた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

11) 疲れを感じた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

12) 他のメンバーに親近感を感じた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

13) グループにまとまりを感じた。

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 あてはまらない

・あなたは今のセッションに現在どのくらい魅力を感じていますか

1 2 3 4 5 6 7
 まったく あまり どちらかと どちら やや かなり 非常に
 感じない 感じない いえは感じない でもない 感じる 感じる 感じる

